

特集・生きる意欲を高め、学ぶ意欲を高める

生きる意欲と学ぶ意欲の関連



上越教育大学准教授

橋本定男

●勉強しない、自信がない

まずは、子どもの現状を見ていこう。PISAなどの国際調査で、日本の子どもは知識・技能を活用し問題解決する力が弱かった。同時に、学校現場を強く刺激したのが「勉強しない子や自分に自信のない子が多い」という結果だった。このことから、今、授業や目の前の子どもを見直すことが求められている。もう一つ、「友達や仲間とのことで悩むなど人間関係形成が不得手な子が増えている」現状（内閣府 二〇〇七年）も重い。

- 現在、多くの学校が正対している子どもの傾向は次の三つである。
- ① 学習意欲が低い
 - ② 自分に自信がない、自己肯定感が低い
 - ③ 人間関係形成能力やコミュニケーション能力が弱い
- このうち、①②への対応を関連付けようとする動きが強まってきた。

●学ぶ意欲

次に、教育改革の流れを見ていく。改正教育基本法で、学校教育は「自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない」とされ（第六条第二項）、学習意欲が学力の重要な要素として明記された（学校教育法第三十条第二項等）。今や、

社会は知識基盤社会時代に突入し、「生きる力」をはぐくむに当たり、学習意欲は欠かせないものとなった。

また、知識基盤社会では「生涯にわたって学ぶこと」や「他者や社会、自然や環境と共に生きること」が求められている（中央教育審議会答申 二〇〇八年）。

- そこで、「学ぶ意欲」を次の三点で捉えることとする。
- ① 自ら進んで学習に取り組もうとする意欲
 - ② 生活の場（家庭）や体験の場で学び続けよう、あるいは学んだことを生かそうとする意欲
 - ③ 共に学ぼうとする意欲

●生きる意欲

生きる意欲を考えるに当たっては、回答申の二つの点に注目する。一つは「将来の職業や生活を見通して、社会において自立的に生きるために必要とされる力」を「生きる力」の内実にしたことである。もう一つは「他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる」としたこと。特に、その中の「共に生きる」と「自分への自信」である。

- そこで、「生きる意欲」を次の三点で捉えることとする。
- ① 夢や希望をもって生きようとする意欲

- ② 自分に自信をもって生きようとする意欲
- ③ 共に生きようとする意欲

子どもの現状への対応から、この学ぶ意欲と生きる意欲を関連付けようとする動きが強まってきた。

●二つの意欲を関連させる流れ

図1 「力」の関係



学習指導要領の理念では、「確かな学力」を基盤に「生きる力」を育てるとされる(図1)。「確かな学力」を育てるには、「未知のものに積極的かつ主体的に興味・関心を抱き、理解を深めたいと思うなどの好奇心をもたせる」(※1)工夫が大切である。これは「内発的動機付け」の考え方に立つ。これまでの授業ではこの工夫

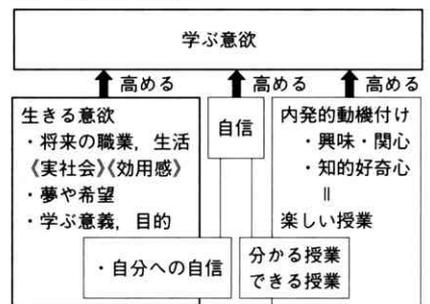
が努力の中心だった。

しかし、勉強しない子どもが増え、「学ぶ意欲」に個人差が広がる現状の前に、もう一つの工夫が始まっている。「勤労観・職業観を育てるキャリア教育などを通じ、子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもったり、学ぶ意義を認識したりすることが必要である」(同答申)を受けた学ぶ意欲を高める工夫である。将来と今をつなげて夢や希望をもつことができれば、学ぶ意欲は高まるとする考え方に立つ。実社会とのかかわりや効用感に訴え、学ぶ意義や目的を認識させることで意欲を高めようとする。「目標や夢の実現のために学ぶことが重要であるとわかれば、頑張れる」(※2)というように、生きる意欲を学ぶ意欲を高めることに生かす方向で関連付ける動きが強まってきた。

●意欲を関連付けるに当たって

「なぜそれを学ばなければならないのか分からない」と勉強する意味が分からないことを訴える中学生(※3)がいる。一方で、「学

図2 「意欲」の関係



校での勉強が、将来どんなことに役立つと考えているか」の質問で、東京の小学生は「心にゆとりがある幸せな生活をするために」など、どの項目においても世界六大都市中、最低の答えだった(※4)。生きる意欲と学ぶ意欲を関連させる動きは強まって、その意義や有効性などの議論はこれからである。今は方法を考えることが重要だと思う。その際、重要となる配慮事項を挙げる。

第一に、将来の職業や生活、夢や希望と今の学習をつなげる際に、いまの自分の生き方・あり方を自ら問うことを必ず求めること。第二に、今の自分に自信、自己肯定感をもつことと「わかる・できるといふ自信が形成されること」(※5)を結び付けること。自信を意欲につなげる(図2参照)工夫が必要である。第三に、第二と矛盾するようだが、失敗や挫折も体験させること。適切な状況下で適切なネガティブ感情を味わわせるのである。「不快な感情に向き合わせ、それを乗り越えさせる」(※5)工夫をする。今、とりわけこのことが必要である。

最後に、他者とのかわりの中で「共に生きる自分への自信」(同答申)をもたせたい。それは言うまでもなく、温かい人間関係づくりである。

参考文献

- ※1 「確かな学力」を基盤とした「生きる力」を「新しい学習指導要領」人間教育研究協議会編 金子書房
- ※2 「動機づけ論を再考する」櫻井茂男「児童心理」二〇〇八年七月号 金子書房
- ※3 「大学を訪れた中学生」辻村哲夫「内外教育」二〇〇九年七月二十四日号 時事通信社
- ※4 「勉強の効用」の国際比較「牧昌見「内外教育」二〇〇九年三月六日号 時事通信社